

解放前江南農村女性における不浄性の構造

——性別役割・領域分担からの考察——

神戸松蔭女子学院大学 東 美晴

1. ジェンダーと不浄性

本研究では、ジェンダーの側面からかつての江南農村女性に関する考察を行い、さらに不浄性の問題を通してかつての江南農村社会における性差の社会・文化的位置づけに言及していくものである。

(1) 伝統農村社会におけるジェンダー

本研究において主題となるジェンダーとは、簡単には、文化、社会的な性差を意味する言葉である。具体的には男性らしさ、女性らしさ、男性役割、女性役割など、それぞれの性に対して振り分けられた社会・文化的規範を示すものである⁽¹⁾。また、ジェンダー論として論じられる範疇は、両性の行動・支配領域としての空間、両性の行動に結びついたものとしての道具などの性差に基づく分類にまで広がる⁽²⁾。この意味でジェンダーは、中国における陰陽思想の男女への振り分けのように、世界観形成の重要な要素となるものである。

さて、伝統農村社会におけるジェンダーを考える場合、労働における男女の位置づけと、漢民族の父系の伝統的家族概念の双方を考えないわけにはいかない。費孝通は、かつての開弦弓村において、女性（嫁）の地位が、彼女のもつ製糸、養蚕技術における能力と、跡継ぎとなる子どもを生むこととの両側面で確立されていくことを描いている⁽³⁾。ともに女性に振り分け

られた役割であるが、それぞれ農民の生活世界において女性に付与された役と、および伝統的家族制度において女性に付与された役割と言い換えることができる。伝統農村社会においては、いわば日常生活における価値規範と、伝統家族制度における価値規範の両側面から、ジェンダー世界が形成されると言える。また、前者においては経済的優位性の確立が、後者に置いては伝統的規範の強さが、ジェンダーの非対称性を導き出すものになる。

本稿では、ジェンダーの非対称性の一つの指標として、女性の出産における不浄性を捉え、江南農村における不浄性の構造の背景に、そのジェンダー世界がどのように反映されているかを考察していくものである。

(2) ジェンダーと不浄性

以下に女性の不浄性に関する議論を簡単に概括し、本稿の視点を述べる。

(a) ジェンダー論と不浄性

不浄性の問題はジェンダー論において、一つの大きなテーマとして議論されてきたものである。

女性の不浄性をめぐる議論の一つ方向として、女性の不浄性はジェンダーの非対称性を表現するものとみなし、その不浄性の源である女性の生理機能の世界観における位置づけに関して、普遍的構造を見いだしていこうというものがある。この方向では、オートナーが提示した自然／文化＝女性／男性という構図がよく知られて

いる⁽⁴⁾。しかしながら、この普遍化は西洋社会における自然と文化の概念に根ざしたものであり、多くの批判も受けている⁽⁵⁾。

同様に、普遍化を試みたものとしてはロサルドの構図がある。ロサルドは男女のそれぞれが主として関わる領域の差異から、家庭内領域／公的領域＝女性／男性という構図を提示し、普遍化を試みた。女性に家庭内領域があてがわれるのは、女性の出産、育児という生理機能に根ざした役割によるものである。そして、ロサルドはダグラスの不浄性の理論を用い、不浄性として捉えられる女性の生理機能に基づく力は、それを強く主張することにより男性を脅かす力として働くことや、男性の統御することのできない女性の連帯の世界を作り上げる場合のあることを指摘している。しかしながら、ロサルドの示した家庭内／公的という構図もまた、多くの社会に見いだされるとしても、その形成過程や意味づけにおいて決して同一視できるものではないという観点から、普遍主義に対する批判がなされている⁽⁶⁾⁽⁷⁾⁽⁸⁾。

ところで、波平は月経・出産における不浄視について、その比較研究を行った論文において、「男性と女性の生理的違いを、社会・文化的相違にまで引き上げ、その対立相違する男女関係、相互依存関係を制度的に表現している」と指摘している⁽⁹⁾。この指摘に従えば、不浄性の設定のされ方、利用のされ方の多様性は、ジェンダー世界の多様性を考察する上での一つの指標となるうだろう。

(b)中国における女性の不浄性の研究

さて、中国においても、女性の出産、月経における血の穢れが語られてきた。たとえば、血の穢れを女性の原因として捉えるものとして、民間に流布していた仏教教典の『血盆経』がある。沢田によれば、『血盆経』は、『水滸伝』や『金瓶梅詞話』等の明代の有名な小説中にも、

その名が登場するという。『血盆経』では、女性が「出産時の血のおりもので地神を汚し、または汚れた衣裳を河水に洗って、下流の善男女がその水で諸聖に茶を供えるという不浄を致したため」、女性は死後血盆地獄（血の池地獄）に落ちるとされている⁽¹⁰⁾。

また、台湾における二つの先行研究、エイハンの事例においても、植野の事例においても、女性の経血および出産時の出血の両義性がその議論の中心になっている⁽¹¹⁾⁽¹²⁾。

エイハンの考察では、まず流された血と体内にある血の位置づけに注目している。「血管を流れる血は健康にとって本質的なものであり、生理時に流れる血は有害なものである」という。さらに、この血の観念は生と死に結びつけられる。すなわち、体内にある時、「血は新しい命の成長に必要なものであるが、経血は女性が妊娠していない時に流れるものであり、その点では死亡した胎児である」という。エイハンは、その上で、経血の力と女性の社会的役割を対比させることによって、分析を行っている。そして、「血の池地獄」引用を交え、本来男性に対して危険を及ぼす力を持つ筈の血の力が、父系ラインの強さによる限定を受け、女性自身を危険に陥らせるものとして位置づけられていることを指摘している。

一方、植野は、まず日常場面では女性の血の不浄性がほとんど語られないことをあげ、祭祀場面で流される男性の血と、女性の経血および出産時の出血の位置づけの違いに目を向けている。そして、ロサルドの議論そのままに、女性の血の力が、公的領域では危険な破壊力となり排除され、家庭内の生殖の領域では創造力となると結論づけている。

エイハンの解釈は、父系原理的な伝統家族制度における女性の劣位性と産出力の位置づけを、不浄性の構造の中に見事に見いだしている。一

方、植野の場合、ロサルドの構図にとらわれすぎたためか、家庭内における女性の不浄性の問題を過小評価しすぎているように思われる。

(3) 本研究の視点

調査地域においては、日常生活でもそれほど多くの女性の不浄性が語られたわけではなかった。植野の事例以上に、不浄性に関する言及は少ないだろう。しかしながら、いくつかの興味深い側面が見られた。

まず、出産に関する不浄性の発現は、階層によって異なっていた。鎮に住む経済的にも上層階級においては、産室を「血房」と呼び、姑さえ産室に入ることを忌むケースがあった。一方で、農村部の農民層では、産室に関する禁忌は、特に存在せず、一部の農民の間では、出産に臨んだ妻を夫後ろから抱きかかえるようにして支え、それを助けることが当然であるとみなしている地域もあった。このように、全体として出産は強く隔離されるものではなかった。

また、産後の産婦が穢れた状態にあるという観念は特に存在しなかった。そのかわりに、地域全体に「血冒」という産後の病の観念と、それに対する対処方法としての禁忌が存在した。すなわち、「血冒」は、産後意識を失い、そのまま失血死する状態を指していた。そして、「血冒」に対する対処方法として、産後決して深く眠り込まないように、横にならずに、布団などを背にあてがい凭れた姿勢で過ごすことが行われていた。これは同時に、このように過ごさなければ、「血冒」を引き起こして死亡するという観念に結びついたものでもあった。さらに、この期間は、出血に対する実際的な対処方法として、脚桶に藁等を敷き、その上に座り続けることが行われていた。公式的には、十二朝までがその期間と認識されていたが、実質的にはそれぞれの身体の状況に応じて、期間は短縮

されていた。

また、産後の出血に関する説明として、それを悪い血とみなし、悪い血が排泄されてしまわない限り危険であるという観念が存在していた。そして、体内の悪い血を浄化する薬として、益母草の煎じ薬を服用することが慣行として広く行われていた。

「血冒」に対する恐怖感のありようは、個々に様々であり、中には少しでも眠り込めかけると夫に起こしてもらったという女性もあれば、特に「血冒」は強く意識されておらず、産後は座って過ごすものだからそうしていたという女性も存在していた。だが、少なくとも、解放以前に家庭で出産した女性のほとんどが、この慣行を行っていた⁽¹³⁾。

ところで、この「血冒」の観念および、産後に流出する血を「悪い血」とみなす観念には、エイハンの論文中に示されている事柄といくつかの点で関連を持つ⁽¹⁴⁾。

まずエイハンの論文においても体内にある血は健康に結びつく良い血であり、体外に排出された血は悪い血であるという認識が示されている。ただし、この悪い血が、病に結びつけられるものであるか、呪術的に用いる等の象徴レベルにまで結びつけられるかは異なっている。

次にエイハンは、血の池地獄に落とされる女性に関して、子どもを生んだ女性、あるいは出産で死亡した女性と述べている。エイハンのこの記述から、血の池に落とされる女性に関する観念の序列として、厳しい場合には出産を経験した女性全員であり、多少ゆるめられると出産の際に死んだ女性、あるいは難産に苦しんだ女性ということになる。これらの女性が罪を得ることの原因は、いずれにせよ出産時の出血がもたらす穢れであり、場合によっては出産による出血全体が対象とされ、また場合によってはショッキングな大量出血死が問題とされたとい

うことになるだろう。これに対して、「血冒」によって表現されている事柄は、大量の出血死そのものである。つまり、エイハンの事例と調査地の事例は、同じ事柄について、その事柄によって引き起こされる不浄性とその罪を語るか、事柄そのものに禁忌を結びつけるかの差であると見ることもできる。

本研究においては、「血冒」の観念を、女性の出産における血の穢れの一つの変形した形態と捉え、当時の江南農村社会のどのような構造が、血の穢れの観念を象徴世界のレベルから病のレベルへと変化させていったのかを考察する。

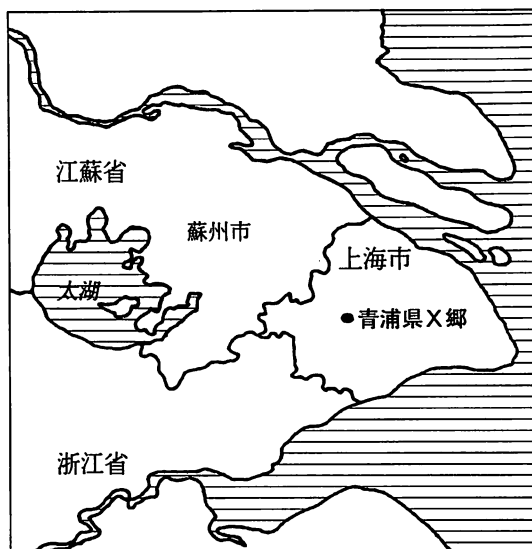
方法としては、調査地における社会的な男女の位置づけを明確化し、その上で穢れとしての「血冒」が語られる構造を分析していくこととする。

(4) 調査の概略

筆者は、上海市青浦区において、1988年から1995年にかけて、7度に渡り調査を行ってきた⁽¹⁵⁾。データの内容がインフォーマントの極めてプライベートな事柄に関わるものであるので、正確な地名は伏せ、X郷とする。なお、調査地の概略的な位置は図1に示す通りである。

調査は、解放前の地域の社会・文化的構造を把握し、その上で文化人類学的視点から農村女性の地位を位置づけていくことを目的に行ってきた。そのため、調査内容は多岐に渡っているが、ここではX郷内の現J村、B村、の60才以上（1992年時点）の女性65人に対して、婚姻、労働、出産に関して行ったインタビューを基本データとする。また、この65件のうち、婚姻が解放以前であったものは52件である。なお、インタビューを行った時期がそれぞれ異なっており、その間に筆者の観点も変化している、あるものは数度のインタビューを繰り返しているが、

第1図 X郷の位置



あるものは高齢のために概略的なインタビューしか行っていないなど、個々のデータの内容は均質ではない。

次に、データ中では、当時の地域特性に合わせて、インフォーマントの所屬地域をJ村、J鎮、B鎮の3ブロックに分類する。それぞれの地域特性を簡単に述べると、J村は純然たる農村部であるが、J鎮は一つの中心的な宗族によって支えられた小鎮であった。これに対しB鎮は比較的規模の大きい、古くから栄えた地域の中心的な鎮であった。なお、詳細に分ければ、データ中にはB鎮に隣接するB村のデータも1件含まれるが、これはB鎮ブロック中に入れることとする。

2. X郷における女性の社会的位置づけ

本来であれば、社会的位置づけ・文化的位置づけの両側面から、詳細に男女の位置づけを検討していく必要があるが、ここでは出産における血の穢れの観念に変容をもたらした要因の一つとして、X郷における女性の社会的位置づけ

第1表 夫婦労働分業のタイプ

(単位：件)

| タイプ | 分業の内容 | J 村 | J 鎮 | B 鎮 | 合計 |
|-----|--------------------|-----|-----|-----|----|
| 1 | 夫：農業／妻：農繁期のみ農業補助 | 2 | 3 | 1 | 6 |
| 2 | 夫：農業＋副業／妻：農業補助、農業 | 1 | 0 | 2 | 3 |
| 3 | 夫：農業以外の職業／妻：農業 | 0 | 5 | 6 | 11 |
| 4 | 夫：農業／妻：農業 | 25 | 0 | 2 | 27 |
| 5 | 夫：農業／妻：農業＋副業 | 0 | 0 | 2 | 2 |
| 6 | 夫：農業＋副業／妻：農業＋副業 | 1 | 0 | 0 | 1 |
| 7 | 親夫婦：農業以外の家業／子夫婦：農業 | 0 | 0 | 2 | 2 |
| | | 29 | 8 | 15 | 52 |

を整理していく。

手順として、(1)労働における男女の分業を整理し、基本的に両性にそれぞれ異なった価値が付与されていたことを示す。さらに、(2)においては、女性労働が家庭内で大きな比重をしめるケース、および婿取りのケースを通して、労働の側面においても、父系原理の側面においても、女性がある程度男性役割に対して代替可能な存在として位置づけられていたことを示す。

(1) 性別役割分担と領域分担

①労働における領域分担

第1表は婚姻が解放前であった女性52人について、当時の夫婦間の役割分業をまとめたものである。タイプ1は農作業は主として男性が担当し、女性は農繁期のみ補助的に農業を行い、主として家庭内の仕事を行うというものである。2、3は、男性が農業以外に現金収入を得られる職業を持っており、女性が家事の一環として農作業を担当していたケースである。4は夫、妻ともに恒常的に農作業を行っていたというケースであり、5、6は妻、あるいは妻、夫の双方が農作業以外に補助的に現金収入を得ることのできる技術を持っていたというケースである。7は1～6までのケースとは異なり、夫婦

・男女間の分業ではなく、世代間で分業を行っていたケースである。ここで得られたケースでは、上の世代夫婦が農業以外の家業に従事し、下の世代の子供夫婦が家事として農業を行うというものであった。

以上から、J村については、分業形態は4のタイプに集中しており、女性が恒常的に農作業に参加することが慣行として広がっていたことが理解できる。また、それとともに、男女役割に関して、ここからでは大きな差を見いだすことができない。

これに対して、J鎮では、1、3タイプに集中しており、男性は経済活動、女性は家事というかなりはっきりとした男女間の役割分担が見られる。なお、B鎮の場合、他のブロックと比べ、比較的大きな鎮であり、個々の住人の背景が均質ではないという特性のために、非常にばらけた結果となっている。

②農民における規範的領域分担

第1表からは、J村における男女間の役割・領域分担をはっきりと見るはできないが、J村の農民層においても規範的な役割・領域分担はなかったわけではない。そこで、ここでは実際の労働内容を取り上げて、男女それぞれの役割がどのように設定されていたか示す。

第2表 農民家庭における規範的性別分業の構造

| | 男 性 | 女 性 | 役割の交換 |
|-------------|----------------------------------|-------------------------------------|--|
| 責任を持つ耕作地 | 田 | 畑 | 女性→田植え、稲刈り等の作業は女性に適しているとされる 男性→畑地の初期の耕作、作物の運搬等では協力する |
| 長じているとされる作業 | 耕す運ぶ（耕作全般、力仕事） | 植える、抜く、摘む（耕地の維持管理細かい作業） | |
| 責任を持つ作物 | 米、麦 | 野菜、綿花、草薬など | |
| 作物の性格 | 経済基盤となる | 家庭内で加工され、消費される | 女性→女性の手による加工品は経済価値を持つ 男性→調味料、衣類等、日常生活の維持に必要な品の買い物 男性の仕事である |
| 家事としての作業 | 家畜の世話、作物の売買、買い物縄など、農作業等に必要なものを作成 | 子供の養育、炊事・洗濯等家庭内の維持管理、織布等、消費されるものの作成 | |
| 責任領域 | 家庭の外回り、外部世界との接触 | 家庭の内回り | |

第2表は、インタビューを通して得られた、男女の役割をまとめたものである。

ところで、当時の農民の性別役割分業を考察する場合、農民の家庭経営の上では、家事と経済活動は分離できるものではなかったということに留意しなければならない。大きな経済基盤は米・麦等の穀物であるが、これら自身がある程度自家消費されるものである。また、家畜や、野菜や綿花など畑の作物は、時には自家消費され、時には補助的収入源として売買の対象になるものであった。このように生産活動と消費活動が完全に分化していなかったことが、J村農民の役割分担を他地域に比べ曖昧に見せている原因の一つである。

第2表から言えることは、男性と女性は、完全に別の場所で活動するわけではなく、耕地において、また家庭内において、それぞれの特性に合っているとされる仕事をふり当てられていたことである。たとえば、農作業では田の耕作は男性が中心であり、畑の維持管理は女性が中心であった。家庭内でも、家畜の世話や屋外で

の作業など外回りの仕事は男性の仕事であり、炊事、洗濯など内側からの維持管理に関わる仕事は女性の仕事とされていた。手仕事でも、縄のように屋外で使うものは男性が作るものであり、糸を紡ぎ布を織るなど、屋内から準備されねばならないものは女性の手仕事であった。両者は仕事の上で完全に独立しているわけではなく、田に関わる作業でも田植えや稲刈り、草取りのような細かい作業は女性に合っているとされ、畑の作業でも耕作や運搬のような重労働は男性に適した仕事とされていた。家庭内においても、重労働を要する時に、男性が力を貸すことは当然のこととみなされていた。このように、同一場面における両性の特性による分業が、J村農民における規範的な性別分業であった。

ただし、経済の面では男性に大きく比重がかかっていた。女性の活動範囲は、その役割の性質上、家庭および耕地の周辺に限定されていた。これに対して、男性の活動範囲は地租の納入や、農産物の売買など、重い物の運搬を伴う力仕事の延長上に、県城や鎮などの外の世界につな

第3表 事例にみる女性の仕事、職業

| 分類 | 種 類 | 事 例 内 容 | 地 域 |
|----|---------------------------|---|----------|
| A | 産婆 | 母が産婆だったので、母について習った。 | J 村 |
| | | 姑が産婆だったので、勤められて、産婆になった。 | J 村 |
| | 推経（マッサージ） ⁽¹⁷⁾ | B村にはないが、B鎮で（女の人に）謝礼を払ってやってもらう。 | B 村 |
| | | 自分でできる。近隣で頼まれればする。謝礼はとらない。近隣のできる人（女性）がやっているのを見て覚えた。 | J 村 |
| | 薬草の知識 ⁽¹⁸⁾ | ある種の物は薬屋に持っていくと買ってくれるので、見つけると、取って乾燥させておいた。 | J B 村鎮 |
| | 織布 | 織ったものを店に持っていき、買ってもらう。 | |
| | 編み物 | 母と姉と上海に行って覚えてきた。できあがったものをその店に持っていき、買ってもらう。 | B 鎮 |
| | 刺繡 | 母に習った。できあがったものを売る。 | J 村 |
| B | 裁縫 | 人に頼まれたら作る。謝礼をもらう。 | B 鎮 |
| | 保姆 | 母は、本人と弟を、伯父に預け、上海で保姆をしていた。舅が妾と住んでいたの、姑は上海で保姆をしていた。 | B B 鎮鎮 |
| C | 乳母 | 母は子供を生んだ後、家計の豊かな人の家で乳母をして乳をやっていた。自分の子には粥を食べさせていたの、下の子はみんな育たなかった。 | J 村 |
| | 紡績工場 | 結婚前、農業労働が嫌だったので、上海県の紡績工場に働きに行った。 | J 鎮 |
| D | 短工 | 夫の死後、夫の働いていた紡績工場で働くようになった工場は上海にあったため、子どもを母に預け、上海に住み込んで働らき、週末にX郷に戻るという生活を50才になるまで続けた。（働き始めたのは解放前） | J 鎮 |
| | | 土地が2ムーしかなかった。義父も長工に出ており、自分の家の耕作が済むと、母と一緒に周辺の農家に働きに行った。行き先は決まらなかった。村内や隣村の比較的土地の多い家に行った。 | J 村 |
| E | 農業全般、晩婚、晩婚女性ス | 夫は本人37才時に死亡。夫の死亡後、耕作をすべて一人でやった。脱穀も、米行に米を納めに行くこともした。船を借り、青浦県城の地主のもとまで、自分で漕いで運んだ。子供の世話もあり、とても忙しかった。 | J 村他 |
| | | 父死亡、兄は他県で労働。母は纏足のため、労働できなかった。そのため、農業労働をすべて行い、晩婚になった。 | B 鎮他 2 件 |

がっていた。経済活動が外部世界とのコミュニケーションの形式の一つである以上、女性は経済活動からは疎外されていたことになる。

（2）性差の規範と序列

①女性による労働のバリエーション

家計における女性の経済的貢献が大きくなれ

ば、家庭内における女性の発言力が増大するという指摘が福武等によってなされている⁽¹⁸⁾。実際、特に貧農層においては、女性もまたその副業によって、現金収入を得ていた。さらに、場合によっては女性が家庭内の主たる農業労働力になっていくケースもないわけではなかった。第3表は女性が現金収入を得ていた事例につい

て、それを分類し列挙したものである。

費孝通の開弦弓村のケースでは、女性労働は製糸・養蚕に限定されていた⁽¹⁹⁾。福武の指摘でも、女性の副業の家計に対する貢献度が増してくる場合という、限定がついていた⁽²⁰⁾。確かに、上の表でも、A、Bのケースでは女性のみが従事する副業、あるいは家事・育児を中心とした女性に付与されてきた役割によって、経済的貢献を果たしているケースであると指摘することができる。これに対して、C、D、Eに関しては、もともと男性に付与されていた役割を、女性が担っていったケースであると言える。ことに、Cの夫の死後紡績工場で働き始めたケースや、Eの夫の死後に農業の全般を行うようになったケースでは、妻が夫の役割を引き継いでいくという観点からは興味深いケースである。

ただし、女性が男性役割を担っていくことに関しては、決して喜んで関わっていったわけではなかった。家庭の状況の上で、その選択をせざるを得なかっただけであり、「不幸なこと」であるという認識が伴っていたことを付加しておく。

(3) 労働における男女の価値

次に、労働の価値が、その性別によって序列化されていたかどうかについて、婿取りのケースを通して考えていく。

第4表は、第1表に示した労働分業タイプのJ村のケースと、婚姻における婿取りの状況とをあわせて示したものである。第4表に示すように、女性は主として家事に従事し、男性が農業を行うというパターンの分業(タイプ1)は2件であり、その2件がともに婿取りであった。このタイプの家庭内における妻、夫双方の扱いはたとえば、夫は本人6才(数え)の時、9才(数え)で小女婿(童養媳の男版)に came。小

第4表 J村における分業形態と婿取り

| 労働分業のタイプ | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 |
|----------|---|---|---|----|---|---|---|
| 件数 | 2 | 1 | 0 | 25 | 0 | 1 | 0 |
| 内婿取りの件数 | 2 | 0 | 0 | 4 | 0 | 1 | 0 |

(注) 労働分業のタイプは第1表にならう。

女婿をとったのは本人が一人娘だから。夫はその時から田に出て、両親を助けて耕作していた。本人は8才から12才の4年間小学校に通い、学校が終わってから牛の世話をする程度のことをしていた。本人は15才から農作業を始めるようになったが、基本的には家事だけであり、忙しい時に手伝いに行く程度だった。」という状況であった。同様に、ある女性は本人は童養媳であるが、姑と舅(婿)について次のように語っている。

「童養媳に came ばかりの頃は家事をしていた。糸を紡いで服を作ったり、洗濯をしたり、野菜を茹げに畑に出たり、すべての家事をしていた。少し大きくなって、12才(数え)の頃から耕作をするようになった。夫と舅と本人の3人で耕作した。舅は一日中朝から晩まで働いていた。姑は朝から晩まで廟に行ったり、大寺に行ったりして遊んでいた。舅は女婿だったからで、舅はやさしかった。姑は厳しかった。」

この二つの事例は、「女兒であっても跡取りとして大切にされる」、「女性であっても家長としての権限を持つ」ということを極めてはっきりと示しているものであり、経済的貢献度による男性労働の女性労働に対する優位という考え方は、まったく主張されていないのである。

なお婿取りの件数は、65件中15件であり、この地域においては、それほど珍しい婚姻形式ではなかったことを付加しておく⁽²¹⁾。

第5表 出産形態と禁忌のタイプ

| 出産方法 | 血冒の言及 | 介助者の有無 | 補助、介助者の限定 | 件数 | タイプ |
|-------|----------|--------|-----------|--------|-----|
| 寝産 | 有り 無し | | | 2 2 | |
| 座産 | 有り | 無し | 妻方女性のみ | 3 | A |
| | | | 女性のみ | 13 | B |
| | | | 女性、男性 | 6 | C |
| | | | 女性介助、女性補助 | 5 | B |
| | | | 女性介助、男性補助 | 4 | C |
| | | | 男性介助、女性補助 | 10 | D |
| | | 言及無し | 言及無し | 3 | |
| 出産経験無 | | | | 4 | |

③まとめ

以上を通して、J村における女性の社会的位置づけをまとめておく。まず、日常生活における規範として、男女両性に付与された役割の規範は存在する。しかしながら、その役割は固定的なものではなく、夫死亡時の妻のケースのように、代替可能性のあるものである。また、その一方で、父系原理が極めて弱められた形で存在していることを見ることができる。それは、婿取り女性に見る跡取り、家長としての女性という位置づけである。ここにおいても、男児に対する女兒の代替可能性をはっきりと見いだすことができる。

3. X郷にみる不浄性の構造

次に、2で示した女性の社会的位置づけが、X郷における不浄性の構造にどのように反映されているかを見ていく。

(1) X郷における出産と禁忌のタイプ

第5表は、この地域の出産に関する禁忌の認識をまとめたものである。比較的新しい方法で

ある寝産を除き、座産の場合の禁忌のパターンは6つに分類できる。さらに、これらの6つのパターンは、禁忌の程度から、出産の場面から夫方の成員を分離するもの（A）、男性を分離するもの（B）、男性の関与に拘らないもの（C）、男性の積極的な関与を要求するもの（D）と言い換えることができる。さらに、このA～Dの4タイプの地域ごとの分布をまとめたものが第6表である。

以上から、X郷における出産の不浄観として、二つの特徴を上げることができる。まず、①地域全体に「血冒」の観念は流布していた、②全体体として、B鎮よりはJ鎮、J鎮よりもJ村の形で、出産の場から男性を排除する傾向が弱まっていく。この二つの傾向について、J村のジェンダーと照らし合わせて、その構造の考察を試みる。

(2) 「血の穢れ」の影響力

A～Dの分類の根底をなすものは、血の穢れの影響力をどのように捉えるかということに置き換えることができる。たとえば、Aのケース

におけるB点の例では、姑が産室を「血房」と呼び、怖れて近づかなかったというものがあつた。Bについては、特に血に対する恐れは語られなかったが、男性はそのような場にはいないものだという観念が示されたが、Dのケースでは妻の胎盤や死産した子どもを夫が処理しているケースさえあつた。少なくとも、C、Dにおいては、女性の血の力はなんら影響を及ぼすものではなく、触れることさえためられるものではないのである。

一方で、血冒の観念は、女性自身に対する血の影響力を語るものであると言えるだろう。女性は出産時の出血を通して、血冒に象徴される危機に直面するのである。女性は、この時期を、眠り込んでしまえば、そのまま死んでしまう可能性があるから、横にならずに、座ったままで眠り込まないように過ごしたという。現代的観点から見れば、いささか無謀な過ごし方であるが、出産が生と死をつなぐ出来事であり、起きていること／眠ること＝生／死という構図のもとに過ごすことで、出産にまつわる危機を回避し生を確実にしようとしていたことが伺われる。血冒とは、すなわち生む性であることに根ざした危機を、流出する血によって表現したものである。

先のC、Dのケースでは、このような危機にある女性／妻をサポートすることは、男性／夫の役割であると認識されていたと言える。ことに、同じ場面においても両性の適性に応じて分業を行う農民の性別分業の規範では、夫が妻の出産を介助することは特に奇異なこととは捉えられていなかったようである。

(3) 「血冒」の意義

X郷における父系原理は、女性の男性に対する代替可能性をかなりの程度認めたものであることは指摘してきた通りである。しかしながら、

第6表 禁忌タイプの地域ごとの件数
(単位：件)

| 出産・禁忌 | J村 | J鎮 | B鎮 | 合計 |
|-------|----|----|----|----|
| A | 0 | 1 | 2 | 3 |
| B | 7 | 3 | 8 | 18 |
| C | 8 | 2 | 0 | 10 |
| D | 10 | 0 | 0 | 10 |

あくまで基本的に優先されるのは男性であり、男女の双方が同等の権利を有しているわけではなかった。X郷がこのような社会である以上、女性の出産や月経に極端な劣位性を付与していく必要性はない。かといって、完全に識別指標を取り除いてしまえるような社会でもない。

「血冒」という出産時の特殊な病をことさらに語らねばならない理由として、男女の境界をことさらに明確にする必要があつたのである⁽²²⁾。いわば、「血冒」という病は、女性が生む性であり、それを通して生命の危機に直面する性であることを物語るものである。つまり、この病を用いて女性の不安定さを語っているのであり、社会の継承者としての男性の優位性、正当性を物語っていると捉えることができるだろう。

4. おわりに

最後に、1930～40年頃の、上海近郊農村の特性を指摘し、結びとする。

福武は、『華中農村の構造』において、江南農村3地区の年齢、性別人口を上げている。浙江、江蘇地区では、女性人口が男性人口に比べて少ないという、従来指摘されてきた特徴が出ている⁽²³⁾。しかしながら、嘉定県を始めとする上海近郊農村のデータでは、むしろ女性人口の方が多いという結果になっている。これ入手した上海市内の4県、青浦、奉賢、川沙、南淮県の県誌に示されたデータと比較したところ、

場所によって多少異なるが、早いところでは1920年代に、遅いところでも1940年代に、女性人口が男性人口を上回っていた⁽²⁴⁾⁽²⁵⁾⁽²⁶⁾⁽²⁷⁾。また、福武は、童養媳、招婿婚などの婚姻形式に関して、伝統的家族形態の崩れつつあると指摘しているが、彼の資料の中において、たとえば招婿婚の割合では、江南農村の他地域に比べ、松江県の割合が高くなっていた⁽²⁸⁾。これらの傾向を総合していくと、江南農村中でも上海近郊農村は特にこの崩れの傾向が甚だしかった地域であると指摘できるだろう。さらに、X郷に見られる不浄性の構造は、このような上海近郊農村の特性を背景に成立しているものと指摘できるかも知れない。

しかしながら、メイエルは花木蘭、『楊家将伝』の穆桂英、白蓮教の王聡児と、息子の代わりの一人娘として、あるいは夫の死後夫の代わりとして、女将軍として活躍した女性を列挙している⁽²⁹⁾。X郷において、婿を取り家長として過ごした女性、あるいは夫に代わり家庭を支えた女性は、メイエルが列挙した女性の農民版とでも言うべきかも知れない。物語の中に男性以上に立派に男性役割を果たした女性、現実に男性役割を果たさねばなかった女性の存在等を考えた時、中国の父系原理の中にある程度の女性による代替可能性が組み込まれていたことも考えられることである。

- (1) 『ジェンダーの社会学』（江原由美子他編、新曜社、1989）参照。
- (2) 『文化人類学事典』（弘文堂、1987、p.407
- (3) Hsiao-Tung Fei, 1939. *Peasant Life in China*. London: Kegan Paul. p.46
- (4) シェリ・B・オートナー「女性と男性の関係は、自然と文化の関係か？」（『男は文化で、女は自然か？』晶文社、1987、pp.85-116（Sherry B. Ortner. 1974 *Is Female to Male as Nature is to Culture?*）
- (5) 山崎カヲル「フェミニスト人類学の流れ」『男は文化で、女は自然か？』晶文社、1987、pp.19-20
- (6) Douglas, M. 1966. *Purity and Danger*. London: Routledge & Kegan Paul.
- (7) ミシェル・Z・ロザルド「女性・文化・社会—理論的概観」『男は文化で、女は自然か？』晶文社、1987、pp.137-170（Michelle Zimbalist Rosaldo. 1974 *Woman, Culture, and Society: A Theoretical Overview*）
- (8) 山崎、1987、pp.23-24。
- (9) 波平恵美子「月経と豊饒」『ケガレの構造』青土社、1992、p.222。
- (10) 澤田瑞穂『地獄変』平河出版社、1991、pp.30-35。
- (11) Emily, M. Ahern. 1974 *The Power and Pollution of Chinese Women* in Margery Wolf and Roxane Witke, eds., *Women in Chinese Society*, Stanford, Calif.
- (12) 植野弘子「血の灵力—漢民族の生殖観と不浄観」須藤健一他編『性の民族誌』人文書院、pp.209-229。
- (13) X郷における出産の概略については、別論文にて扱っているので、本稿では省略する。東「出産にまつわる文化の変遷—上海近郊農村の事例から」『日中社会学会報』5号、1991、参照。
- (14) Emily, M. Ahern. 1974.
- (15) X郷における調査は、当初木下英司（早稲田大学）、富田和広（県立広島女子大学）と共同で始めたものである。
- (16) 福武直「華中農村社会の構造」『福武直著作集9巻第』1976、東京大学出版会、p.108他
- (17) 推経は民間療法として、子どもの病気を対象に行われたマッサージである。東「病と鬼—江南農村の医療と民間信仰（〜1949）」『日中社会学研究』第2号、1994、p.10参照。
- (18) 草葉の知識は女性達の間で伝承されており、日常の健康管理に用いるとともに、希少なも

のは売買の対象とされていた。東、1994、参照。

- (19) Fei, 1939, p.38
- (20) 福武、1976、p.83、p.108
- (21) 過去のX郷における婚姻形態については、東「童養媳再考－上海郊区農村の事例から」『現代中国』68号参照。
- (22) 波平、1992、p.256
- (23) 福武、1976、pp.51 - 52
- (24) 『青浦県誌』上海人民出版社、1990、p.146
- (25) 『南淮県誌』上海人民出版社、1992、p.114, p.116
- (26) 『奉賢県誌』上海人民出版社、1987、pp.161 - 162、p.166
- (27) 『川沙県誌』上海人民出版社、1990、p.133
- (28) シャルル・メイエール『中国女性の歴史』辻由美訳、1995、白水社、pp.174 - 177